

素顔の 愛媛大学女性研究者

| 愛媛大学ロールモデル集

| *Women's Future Development Center, Ehime University*



[ごあいさつ]

若い世代へのエール

愛媛大学女性未来育成センター長 小島 秀子

Hideko Koshima

Women's Future Development Center, Ehime University

愛媛大学は、平成22年度文部科学省「女性研究者支援モデル育成事業」(平成23年度からは「女性研究者研究活動支援事業」に名称変更)に採択され、実施母体として女性未来育成センターが設立されました。本学はこの事業を女性にターゲットをあてた人材育成としてとらえており、女性未来育成センターでは、女性研究者活躍のための環境整備、次世代育成、女性教員増員に一体的に取り組んでいます。最終目的は、優れた女性研究者を持続的に育成する大学のシステムを作ることにあります。

愛媛大学は学生約1万人の四国最大の総合大学であり、地域に根ざした大学として教育・研究・社会貢献の面で多様な人材を必要としています。しかし、大学全体の女性教員比率は12%と低く、なかでも、理学部・工学部・農学部の女性教員は全部で12人にしか過ぎず、5%の極端に低い比率にとどまっています。これに対して、全学の女子学生は40%と低くはなく、また後期博士課程の女子院生は25%に達しており、しかも年々増加しています。

このような女子学生・若手研究者にとっては身近にロールモデル(お手本)が少ない環境にあって、将来の指針にさせていただくために、事業の一環として女性研究者のロールモデル集を発行することに

なりました。本学の各分野で活躍されている女性研究者に、自分の書きたいことをありのまま率直に自由にとお願いしてご執筆いただきました。

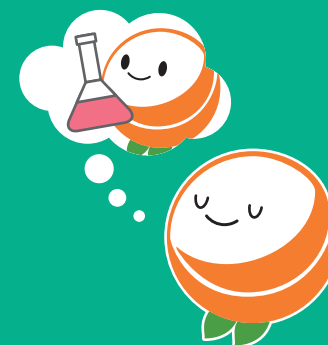
ところで、今年の世界化学年(International Year of Chemistry: IYC2011)です。キュリー夫人のノーベル化学賞受賞(ラジウム、ポロニウムの発見)100周年を記念して定められました。子供の頃にキュリー夫人の伝記を読んで感激したのを覚えています。女性であっても認められる時代になったのです。私は化学を一生の仕事と決め、研究を続けるために職場を何度か変わり、研究分野を変えたこともありますが、お蔭で私の化学の世界は広がり、これまで何とか第一線で研究を続けることができました。しかしこれも自分の力だけでは到底無理で、周りの助けがあったからに他なりません。

生物の世界では多様性が大原則で、ある条件に過剰適応すると環境の変化に対応できず、生き残ることができないそうです。数十年前の学生時代に研究室の先生(女性)は、「これからの社会は女性をどう活かすかで決まる」と言われました。最近の研究室の現場では、女子学生は大変元気です。彼女達の将来の活躍が楽しみです。女性研究者が周りにいるのが普通になり、真の男女共同参画が実現する日の来ることを願っています。

CONTENTS

愛媛大学ロールモデル集

センター長あいさつ	3
杉浦美羽 Miwa Sugiura	5
石野智子 Tomoko Ishino	6
土屋 旬 Jun Tsuchiya	7
センター長対談 [濱村奈津子]	8
佐藤久子 Hisako Sato	10
江口真理子 Mariko Eguchi	11
川瀬久美子 Kumiko Kawase	12
松永真由美 Mayumi Matsunaga	13
センター長対談 [堀 利栄 / 榊原正幸]	14
藤山幹子 Mikiko Touyama	16
伊地知紀子 Noriko Ijichi	17
江上園子 Sonoko Egami	18
土屋由香 Yuka Tsuchiya	19
高橋憲子 Noriko Takahashi	20
卒業生インタビュー [富川千恵]	21
事業説明	22





01

Miwa Sugijura

幅広い人生経験が、
現在の自由な研究活動に
還元されています。

杉浦 美羽

すぎうら みわ

◎ 所属：愛媛大学 無細胞生命科学工学研究センター
グリーン環境エネルギー部門
◎ 役職：准教授

自由でエレガントな科学者が
私の永遠のテーマ

私の生き方のテーマは「エレガントで自由奔放」。友人には「ぶっ飛んでいて次に何をするか楽しみ」と言われるくらいです。とても皆さんの生き方のモデルになるとは思えません。これから研究者になろうと思っている、迷っている人に、必ずしも小さい頃から勉強ばかりしていた人や、実験体験をしてきた人が研究者になっているのではないと、参考になればと思います。

私は小さい頃から研究者になろうと思っていたわけではありません。何にでも興味を持ち、始めたことにはある程度極めないで済まない性格で、バンド活動、茶道、華道、料理、フェンシング、アーチェリー、ウィンドサーフィンなど、色々なことをやってきました。意外かもしれませんが、これらへの興味と真剣な取り組みは研究を進める上でとても役に立っています。むしろ、これらの経験の集大成が研究のサイクルは「研究計画→実験→学会

発表→論文執筆」、バンド活動は「曲作り→アレンジ・練習→ライブ→レコーディング」で同じパターンです。また、電子楽器を使う音楽やフェンシングは、どちらも電気回路を利用して、修理や工作は日常です。この経験は実験で使う機器の作業や修理にとっても役に立っています。

研究活動では、研究成果を伝えるために学会発表や講演を行い、様々なバックグラウンドを持つ研究者と討論しますが、これに役立っているのが音楽活動で得た「パフォーマンス性」と、茶道や華道で得た「エレガントさ」です。聴衆の興味を引くノウハウは数十年に渡るライブ活動で獲得しました。そこにエレガントさをプラスすることによって、スムーズな討論や人間関係を築いてきました。お蔭で国内外の研究者と共同研究を行うことができ、一人ではできない研究成果を出すことができています。そう、私の研究者としてのテーマの二つは「エレガントさ」なんです。

もう一つのテーマは「自由」です。私は縛られるのが嫌いで、自分で決めたことを突き進める性格です。両親にすら相談し

ません。いつも事後報告だけです。私にとって研究は、博士号を取って念願の光合成研究を始めた理研時代からのライフワークで最優先事項です。研究を広げるチャンスがあれば、大切な人と離ればなれになっても研究拠点を変えてきましたし、睡眠時間が一日に二時間になる超ハードスケジュールでも出張をこなし、夜中までのお酒を伴う研究者との付き合いもこなしてきました。こんな生き方を貫くには常に自由に動ける身軽さが必要で、結婚や出産を犠牲にしてきました。

辛いことも沢山ありましたが、幼い頃からの色んな経験から得た「仲間作り」を得意とする私は、多くの人に助けってもらってやってくることができました。私のような生き方をしたいと思う人は希だと思えますが、研究者になりたいと思っているなら研究以外の色んなことを経験し、女性の利点であるエレガントさを身につけることをお勧めします。また、研究者になれるか不安に思っている人には、決して幼い頃からの研究に関する経験が必要というわけでは無いことを伝えたいと思います。

Profile

略歴 / 1997年、神戸大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了(農学博士)。同年、理化学研究所基礎科学特別研究員、1999年、大阪府立大学大学院生命環境科学研究科助教を経て、2008年より現職(大学院理工学研究科理学系化学部門を併任)。この間、1999年東京農工大学工学部非常勤講師、2002-2004年フランス原子力研究所(CEA Saclay)にて共同研究員、2010年放送大学非常勤講師、2010年より科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業「さがけ」研究員。2011年日本女性科学者の会奨励賞受賞。

「どうやったら研究者になれるの？」 「仕事と家庭の両立は？」

それは今回ご紹介している15人の先生方も抱えていた想いかもしれません。
この冊子では愛媛大学で活躍する女性研究者のみなさんが
歩んできた道のりをご紹介します。



愛媛大学で活躍する女性研究者たちの声

Miwa Sugijura / Tomoko Ishino / Jun Tsuchiya / Natsuko Hamamura / Hisako Sato / Mariko Eguchi / Kumiko Kawase / Mayumi Matsunaga / Rie Hori / Masayuki Sakakibara / Mikiko Touyama / Noriko Ijichi / Sonoko Egami / Yuka Tsuchiya / Noriko Takahashi / Chie Tomikawa

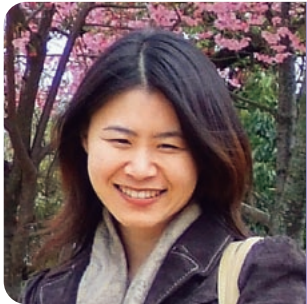
女性研究者として

好きな研究で

輝き続けましょう。

石野 智子

いしの ともこ

◎ 所属：愛媛大学大学院 医学系研究科 寄生虫病原体学分野
◎ 役職：准教授

02

マラリアに魅せられて

博士課程の終了を目前に控え、研究への想いはあれど勇気がなかった当時頭から離れない笑顔がありました。それは、第三国の子供たちのもので、その笑顔を増やしたいという気持ちと研究者になろうという夢の間で迷っていました。2つの「好き」を結びつけるべく、私は熱帯病を研究するという可能性を探り始め、幸運と人々の好意に恵まれ、マラリア研究者として新たな一歩を踏み出すことができました。

マラリア原虫の持つ複雑さ狡猾さに、私はすぐに魅了されてしまいました。単細胞のちいさな生き物が、蚊とほ乳類という2つの宿主を渡り歩き、宿主細胞に適応していく様にはただ感嘆するのみです。私はあまり多くの手が付けられていない、肝臓への感染ステージを標的として、遺伝子組み換え原虫の作出という切れ味鋭い鉋を用いて、肝臓感染に関わる原虫分子を複数同定することに成功しました。最近では、寄生戦略の包括的な

理解に少しでも近づくために、サイエンスの基本に立ち戻り原虫の動きを直接観察することに力を注いでいます。

一方で、期待されていることと同義だったのかもしれませんが、担うべき責任も増え、試行錯誤する心の余裕も持てなくなる時期がありました。自分の能力を超えた仕事を完成度高く仕上げなくてはならないという思い込みと、地方大学においてはまだまだ珍しかった女性研究者としての孤独感が、閉塞感に繋がっていたのかもしれない。もう一度だけ、研究が本当に好きかどうかを自分に問いかけるつもりで、遠いフランスへと旅立つことにしたのでした。

日本学術振興会および日本パスツール協会にサポートして頂き三年弱フランスに研究留学することができました。言葉も通じず、思想も異なる仲間たちと、ただ研究をよくしたい一心で協力して仕事を行う上で、改めて研究への向き合い方を考えるよい機会になりました。フランスでは、20〜30年前に全分野で女性の進出が成功しており、女性が働くのが当たり前、

魅力的であるのも、子供を産むのも一年に5週間のバカンスを取るもの当たり前。

そんなシステムが構築されていました。出産育児に関しては、手厚い保護があるのももちろんですが、無痛分娩、粉ミルクの活用など、早期の仕事復帰に向けての工夫も多く見られました。良いことばかりあるはずもなく、収入が低い、事務処理の速度が遅いなどの問題もあります。私自身は、ワインとチーズを片手に、快適にのびのびとサイエンスと向き合うことができ、再びサイエンスで生計を立てる勇気と覚悟を得て帰国致しました。

この手記を書いている現在、なでしこJAPANの熱狂が日本中を席卷しています。「生懸命な女性たちは、お化粧をしていなくとも、素敵な洋服をまとってなくても、とても美しいものでした。私たちが学ぶことのできることは、「成果を挙げれば必ず認められる」ということでしょうか。私もまずは私たち女性研究者に何ができるのか、どうやって人を感動させられるのかを真剣に考えてみたいと思います。

Tomoko Ishino

Profile

略歴／1996年3月、東京大学卒業。1998年3月、東京大学薬学系研究科修士課程修了。2001年3月、東京大学薬学系研究科博士課程修了。2001年3月、薬学博士（東京大学生物系薬学）。2001年4月、三重大学ポスドク。2005年4月、三重大学大学院医学系研究科助手。2006年3月、医学博士（三重大学寄生虫学（含衛生動物学））。2006年7月、パスツール研究所ポスドク。（2007年2月-2009年2月、日本学術振興会海外特別研究員）。2009年3月より現職。

研究者になるまで

徳島の田舎で生まれ、子供の頃は魚や虫などを捕ったり、山菜を採集したりして育ちました。家の片隅に、他の家族の誰も見向きしない世界が変わった動植物や宇宙の写真を集めたライフネイチャーライブラリーという30巻くらいの本があり、暇なときはそれを眺めるのも好きでした。中学生くらいからは従姉から借りた天体望遠鏡で、一人夜な夜な星雲や惑星を探して過ごしました。特に宇宙の謎を明らかにしたいとかいう問題意識があるわけではなく、単に不思議なものを見るのが好きなだけであつたと思います。ただ、どうせ大学に行くなら宇宙や地球の不思議について勉強したいと思

い、得意な教科でもなかったのですが物理系の学科を選択しました。修士課程ではデータの持つ意味を考察してまとめ、論文発表するという連の研究過程が楽しくなり、特に就職や将来のことを深く考えずに博士課程まで進みました。幸運

Profile

略歴／1998年3月、大阪大学理学部宇宙・地球科学卒業。2000年3月、大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻修士課程修了。修士(理学)の学位取得。2001年4月-2003年3月、日本学術振興会特別研究員(DC2)(大阪大学)。2003年3月、大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻博士課程修了。博士(理学)の学位取得。2003年4月-2005年2月、日本学術振興会特別研究員(PD)(東京大学・米国ミネソタ大学)。2005年2月-4月、米国ミネソタ大学Postdoctoral Fellow。2006年1月-3月、愛媛大学地球深部ダイナミクス研究センター研究推進研究員。2006年4月-2006年12月、愛媛大学地球深部ダイナミクス研究センター学術創成研究員。2007年1月-2008年9月、日本学術振興会特別研究員(RPD)(愛媛大学)。2008年10月より現職。

Jun Tsuchiya



03

自然体で、

がんばっています。

土屋 旬

つちや じゅん

◎ 所属：愛媛大学上級研究員センター
(地球深部ダイナミクス研究センター)◎H◎関連
◎ 役職：上級研究員(講師)

研究者になって

もあり、博士課程、ポスドク時代と学振の研究員に採用されたため、そのまま研究者へのレールに乗ったような状態でした。ポスドク二万人時代と言われて将来に不安はなくなつたけれども、行き詰まつたときはそれはそれでなんとかなるだろうという持ち前の気楽さでここまでやってきました。

博士課程のときに結婚し、ポスドク時代は、夫婦でアメリカのミネソタ大学で研究員として働きました。その時に妊娠し、アメリカで出産する予定でしたが、妊娠後期になって主人の就職先が愛媛大学に決まり、私一人アメリカに残って出産、子育ては無理だろうということ、ポスドクを辞めて帰国しました。いきなり無職になってしまい、特に縁もゆかりもない愛媛で子育てをすることに不安がありました。が、Hの人の入船センター長からも時機を見て研究に復帰することを勧めてください、感謝しています。その当

現在二人の娘がいます

時、ちょうど学振から子育てで一時研究を中断した人の復帰をサポートする特別研究員(HPO)という制度が始まり、幸運にも第一回目に採用されて研究に復帰できました。子育てしながら研究を続けることは、ときに大変なこともありませんが、夫婦の協力と周りのサポートのおかげで何とかなってきました。海外出張も工夫次第でこなせますし、子育て研究者を取り巻く状況は急激に良くなつてきていると感じています。

下の娘は生後7カ月で、テニョアトラック教員という立場にありながら出張もままなりません。でも、今はじっと耐えて出来ることを精一杯やりたいと思っています。子供の成長を見ることは純粋に喜びですし、ここで焦っても何も良いことはありません。愛媛の自然環境豊かな中で育ち、子供たちも自然界の不思議が大好きなようです。何事も、気持ちに余裕をもたせて楽しみながらやるのがコツなのかな、と思っています。



微生物が語る、わたしたちの多様性

小島 まずはこの度の最先端・次世代研究開発支援プログラムの採択おめでとうございます。飛躍へのステップになりますね。

濱村 ありがとうございます。ようやく第一歩、という感じでうれしいです。

―これまでの経歴について

濱村 大学は地元だったこともあり、千葉大学園芸学部に入りました。その後アメリカの大学院へ進みますが、きっかけは大学三年の夏に語学留学をした時に感じた、向こうの大学設備の良さでした。その後学部を変えて博士をとり、いくつかの大学で研究員として勤務していました。

―想いを持って日本へ帰国

小島 日本へ戻り、沿岸センターへ変わってきたきっかけは？

濱村 アメリカでの研究も長くなく、楽しかったのですが、将来を考えた時に、国際貢献をしたいと思いましたが、研究している環境分野では、今後アジアの環境問題が大きくなるのではと考えました。その時リーダーシップをとるだろう日本で、女性の

教育に力を入れたいと思ったのがきっかけです。ちょうど日本でも、女性研究者の支援に力を入れていると知りましたし。

小島 なぜ女性の教育に注目されたのですか？

濱村 間接的ですが、世界的な課題である貧困や食糧不足、環境問題を考えた時に、まず女性の教育が必要だと考えたからです。きっかけは、アメリカでパキスタン・アフガニスタンの女性の教育に力を入れている団体の話。そこによると、女性は教育するとコミュニティに帰って、属する地域社会のために働くのだそうです。貧困問題や公衆衛生問題を解決するには、コミュニティの女性を教育するのが重要だという話に感銘を受けました。

小島 自分の研究で精いっぱいの人が多い中、若い頃からそういう自覚を持っている研究者はあまりいないですね。

濱村 アメリカにいた頃は、よく周りから「日本は女性研究者が少ない、研究を続けていくのは大変」と言わ

ていく世代になってきました。環境中の菌が全部見られるということは、この分野としてはすごいことなんです。

小島 自然界の本当の姿が分かるんですね。

濱村 はい。微生物と言えば「バイ菌」のイメージがあるかもしれませんが、実はとても大事なものです。自然が自然の形なのも、微生物のおかげなんです。人間にとって毒だから「汚染」と言っていますが、微生物にとっては栄養源の場合もあります。重金属やヒ素を代謝して育つ微生物も研究しています。

小島 一つの目線だけで見ているのはダメ。全体を見なくてはダメですね。

―多様性をもつことの重要性

濱村 人間の活動も環境に影響しています。人間も生態系の一部分であることを認識しないといけないと思います。私としては微生物生態系の多様性と、女性やマイノリティの活躍などの社会の多様性は、とても似ていると思っています。微生物も一つの種だけ突出しているような状態はほとんどなく、自然では多様性が重要です。微生物の多様性を通して、人間社会の多様性を理解できるような気がしています。

小島 多様性は生物の世界の大原則ですね。生物はいかに新しい環境に対応できるかで生き残りが決まってくるんですね。

濱村 その通りで、ある条件に特化した「コミュニティ」になると、振り幅が少なくなります。でも興味深いのは、そんなコミュニティも少し時間を置くと、もとの多様性のあるコミュニティに戻っていくんです。それは生き残るための必然だと感じています。日本もその必然として、多様化に向かってきているのではないのでしょうか。世界を見ても、一国の大国だけでは無く、これからはアジアが中心にもなっていくのではと思っています。

―最後に、女性研究者と研究者を目指す皆さんへ

濱村 自分の世界を限定せず、広い視点を持って、可能性のある所はどこでも行ってほしいと思います。自分を限定するのは自分ですし、自分の考えを限定するのも自分。いろんな可能性を持ってほしいです。これは研究者だけでなく、若者全体へ向け



濱村 奈津子先生 Profile

略歴 / 1994年、千葉大学園芸学部卒業。2001年、オレゴン州立大学院修了、PhD。2001年～、海洋バイオ研究所、モンタナ州立大、ポートランド州立大研究員。2009年～、先端研究推進支援機構 沿岸環境科学研究センター勤務(グローバルCOE准教授)。2011年、最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択。

参考URL

- 最先端・次世代研究開発支援プログラム <http://www.jsps.go.jp/j-jisedai/index.html>
- 愛媛大学グローバルCOEプログラム <http://ehime-u.cyber-earth.jp/g-coe2007/jp/index.aspx>
- 愛媛大学沿岸環境科学研究センター <http://www.ehime-u.ac.jp/cmcs/>

れて、自分でもそう思う反面、なんだかやしい気がしていました。でも、日本の女性研究者が何を必要としているかは、外から見ただけでは分からない。日本で実際に使える貢献をしたいと思いました。

―沿岸センターの魅力

濱村 特にアジア地域において、長年のデータと経験の蓄積もあり、実績がある点で魅力的です。世界中の環境・生体サンプルを保存するeS-BANK(生物環境試料バンク)や、分析機器なども充実していることが、優秀な若手が集まる理由になっていると思います。

―技術の発展で分かってきた「環境汚染」の奥深さ

小島 研究の中で「これは面白い」って思ったことはありませんか？

濱村 汚染環境中にある微生物の代謝について研究していますが、実は研究室で培養できる菌は、環境中にいる菌の1%にしか過ぎないんです。残りの99%は、これまで育てられなかったのですが、現在は次世代シーケンサーという大量のDNA配列を読める機械が、ここ数年で素晴らしい発展して、環境中の遺伝子を網羅的に読ん

を上げておく必要があると思います。たとえば、英語を勉強できる時にしておくとか…。そうしないとチャンスがあった時に対応できなくなりますよね。

私はアメリカの大学院で生態学に興味を持つようになりましたが、日本にいた頃はあまり知識もありませんでした。様々な知識を持っていてこそ、何かに特化できるし、何が重要かがわかる芽が育つのだと思います。

小島 理系の世界では境界領域にこそ、新しいことがあると言われています。研究は自分の個性が表れる世界なので、あまり理系・文系と分げずに興味のあることをいろいろ学んだ方がいいですね。

若い世代へのメッセージ

私は、修士課程を修了してから企業で19年間にわたってシリコン電子デバイス開発の最先端分野に携わってきました。45歳にして研究への夢を忘れることができず、研究員としてアカデミックの世界にはいりました。開発の傍ら研究の最初の第歩を踏み出してから紆余曲折を経てちょうど20年目に、愛媛大学大学院理工学研究所の准教授に採用されました。独立した自分の研究室がもてたことに本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、幸運なことにその一年後には教授に昇進させていただきました。研究を自由にできるチャンスを与えていただけただけは、何にも変えたい喜びとともに責任感を感じます。

研究への夢のために、

自分を信じて

地道な努力をする。

佐藤 久子

さとう ひさこ

◎ 所属：愛媛大学大学院理工学研究所(理学部化学科)
◎ 役職：教授

Hisako Sato



04

とを言える立場にありません。なんとか世界に通用する研究をしたいと毎日、格闘しているところです。皆さんに言えることがあるとしたら、夢を追い続けて走り続ける、そのため毎日努力をする、たとえ、それがうまくゆかずかどうかわからないとしても、自分の力を信じて！ 自分の人生を生きたことだと、多くの先生方から私が励まされ続けていることを皆さんにも伝えたいと思います。

企業に入社したときは、まだ男女雇用機会均等法のない時代でした。女性は残業を制限されておりましたが、企業でしたので、自由にいろいろな経験はさせてもらえました。しかしながら、企業での開発に携わっているときも、研究者の道をどうしてもあきらめることができないでいました。入社六年目に、学会で知り合ったばかりの山岸皓彦先生に私の現状と研究への思いを手紙に託しました。その鉛筆書きの手紙から、私の研究生生活は始まりました。今では社会人博士課程などありますが、その当時はそのような制度はありませんでした。平日は会社での開発の仕事、土日は別のテーマで研究を続け、35歳のときに理学の博士号を取得しました。

そんな状況の中、七年後に会社の開発結果をもとに工学の博士号を取得できました。それでも、研究者になることはできませんでした。論文数も少なく、研究経験もない私にすぐに大学の定職があるはずありません。このまま自分の人生が終わってゆくのかとあきらめかけていたころ、冒頭で述べた研究員の話がきました。安定した企業の生活を捨てて、将来のわからない険しい道にはいるのかと周囲からみるとかなり無謀な判断だったかもしれませんが、その後は本当に履歴どおりの綱渡り人生、その間、多くの先生方のご好意にすがってやっと確保した実験室での研究、毎年の研究室の移動中、完璧な状態なんてない、どんなときもやり続けることが研究だと教えられました。

私は研究の道途中ですので、偉そうなこ

大切な出会い

生まれてはじめて真っ赤なバラの花束をもらったのは、研修医一年目の冬、担当していた急性リンパ性白血病の男の子からでした。その日は、一年間つらい抗がん剤の治療に耐えてきたその子がやっと家族のもとに帰り、兄や妹と一緒に遊べるようになった記念すべき日でした。同時に私にとっても大切な思い出の日となりました。その後白血病が再発、その子はたくさんの治療を、その小さな体で頑張つて頑張つて、そして天国に逝きました。

当時は今ほど白血病の遺伝子異常について分かっておらず、治療成績も現在ほど良くありませんでした。大切な命を救うためには、がんの個性(染色体・遺伝子変異)に合わせた新しい治療法の開発が必須だということをお願いされる毎日でした。生きることをあきらめざるを得なかった子供たちに、研究して、がんを治してといわ

れている気がして、研究の道に入りました。

それから何年も経ち、私も2人の子供を持つ身となりました。病気の子供たちに役立つ研究をするという当時の約束を果たせたととても言えませんが、研究をあきらめなかったことだけは約束を守れたでしょう。か。どんなに頑張つてもデータが出なかつたり、診療に時間をとられ研究に打ち込めなかつたり、何カ月も続く我が子の夜泣きに疲れきつて、もう無理かなと思うことが何度もありました。でもその度に理解ある上司や同僚に支えられ、家族に守られ、今も研究を続けることができ、心から感謝しています。

すてきな女性たち

私は広島大学医学部を卒業し、同大学の小児科に入局して、病気の子供たちの診療にあたりました。その後白血病のことがもっと知りたくて、広島大学原爆放射能医学研究所、国立小児病院小児医療研究

センターで勤務後、ロンドンInstitute of Cancer Research(ICR)に渡りました。

ICRには小児白血病のetiology(原因)を明らかにする研究をしている、心優しいボスマンGeorges教授と共に、当たり前のように子供を産み、すばらしい仕事をし、ゆつくり家族との時間を楽しむ女性たちが何人もいました。もちろん彼女たちは仕事でも家庭でも人一倍頑張っていました。なにより育児をしながら働き、生活も楽しむということが周囲の女性にも男性にも当たり前のごとくして受け入れられていることが、それまで自分がいた環境と大きく違っていました。男女の差を意識しないことはこんなに働きやすいことなのだ、ということも実感しました。

欲張りに生きて！

愛媛大学には家族で三年前にまいりましたが、こは子供を育てる女性が働きやすい環境がよく整っていると思います。一方でこんないい環境なのにもっとがんばろうよ、

女性たち！と思うこともあります。

私はあまり男女を意識しないように育てられ、小さい頃はよく男の子たちとサッカーや野球をしていました。夫は、出産だけは代わってもらうことはできませんでしたが、それ以外の子育てや家事は同じように関わってくれています。あまり女性であることを意識しすぎないで、女性だからってあきらめないで、仕事も家庭も、研究も趣味も、したいことをとんとんして輝いていたら、きっと周りに理解し、協力してくれる人が現れると思います。自分を支えてくれている多くの人たちに感謝しながら、欲張りに生きてみて下さい！

05



感謝して。

多くの出会いに、

江口 真理子

えぐち まりこ

◎ 所属：愛媛大学大学院 医学系研究科小児医学
◎ 役職：准教授

Mariko Eguchi

Profile

略歴／広島大学医学部医学科卒業、同大学小児科入局。広島大学大学院医学系研究科病理系専攻にて学位取得。広島大学医学部附属病院小児科、広島大学原爆放射能医学研究所、国立小児病院小児医療研究センターに勤務後、ロンドン大学Institute of Cancer Research, postdoctoral fellow。帰国後、獨協医科大学血液内科を経て、2008年より愛媛大学医学部小児医学勤務。

Profile

略歴／1981年、早稲田大学理工学部応用化学科卒。1983年、東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程終了。1983-2002年(株式会社製作所勤務)。1992年、博士(理学)北海道大学。1999年、博士(工学)東京大学。2002-2003年、東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻学術研究支援員。2003-2006年、科学技術振興機構CREST研究員(研究場所：東京大学)。2006-2009年、科学技術振興機構さきがけ専任研究者(研究場所：東京大学、お茶の水女子大学)。2009年4月-2010年3月、愛媛大学大学院理工学研究所(理学系)准教授、2010年4月より現職。

迷ったり反対されても、
自然地理学

私の研究テーマは、「自然地理学」のなかでも、過去数万〜数千年間の平野地形の変化「地形発達史」を説明するといふものです。いわば地学(地球科学)に近いのですが、文理融合の総合科学としての地理学に、私はとても愛着と誇りを抱いています。とはいえ、学部卒業後の進路を決める段階になって、大学院進学を逡巡する気持ちもありました。また、大学院へ進学しようと心を決めると、「女子は学歴があると結婚しにくい」と考えていた両親から反対されました。しかし、そのたびに「でも、やっぱりもっと地理学を追究したい!」という気持ちがむくむくとわき上がってきたものです。そういう衝動が私の研究生活の原動力になっているのだと思います。

研究生活の中で、
あれば幸せな能力

研究生活では多くの人に支えられてきました。大学院時代には指導教員は

Kumiko
Kawase



06

でも、やっぱり追究したい!
やってみたら?

川瀬 久美子

かわせ くみこ

◎ 所属: 愛媛大学教育学部
◎ 役職: 准教授

勿論、先輩・同輩から、研究の組み立て方、分析手法、研究への姿勢など色々なことを学びました。現在では、学会発表や共同研究の場で、ほかの研究者と議論しながら研究を進めています。また、大学に就職した場合は、同僚教員や事務の方々と学内の運営を行う一方で、教育活動として様々な学生と接することになるでしょう。今日の大学の研究者には、柔軟なコミュニケーション能力が求められています。研究者に求められる第一の資質はやはり「研究能力」(「研究への熱意」(なので、コミュニケーション能力が「不可欠」とまでは言い切りません。しかし、それがあれば様々な局面で事がスムーズに運ぶでしょうし、なければ苦労するところがあるかもしれません。はい、(外からどう見えるかは判りませんが)私は苦労しています。

家庭生活、うちの場合は

どのようなライフスタイルに満足できるかは、その人と家族(配偶者・子ども)の性格や価値観次第なので、悩むよりやってみたら? というのは無責任でしょ

“ひと”を幸せにする

ということ。

松永 真由美

まつなが まゆみ

◎ 所属: 愛媛大学理工学研究科
電子情報工学専攻 電気電子工学コース
◎ 役職: 講師

教員として

れていることを信じて研究をしています。

教員として育てた人材が未来の社会を築きます。ですから、鬼になって叱咤激励する時も、母となり成長を見守る時も、友人として共に新しい技術に挑戦する時もあります。どんな時も、それぞれの学生がその能力を開花させ、笑顔で歩む人生を願うことです。時として、この気持ちを分かってもらえず、辛い思いをすることもありますが、巣立った学生の多くが、独特の研究姿勢と指導法で最初は圧倒されたが、世の中に出て、私の言葉の意味が分かり、今は指導をうけて本当によかったと言ってくれた時、大学の教員で本当に良かったと思います。

大学の教員とは、誰にでもなれる職業ではありません。それだけに、担っている役割も重要です。しかし、自分の生み出した技術を手にした人や、巣立った学生の笑顔を見たとき、何にもまして自分自身が「しあわせになれる職業」でもあります。

Profile

略歴 / 1995年3月、九州大学工学部情報工学科卒業。1997年3月、九州大学大学院システム情報科学研究科 情報工学専攻修士課程修了。1998年1月、University of Wisconsin-Madison, Dept. of Electrical Computer Engineering 留学。2000年3月、九州大学大学院システム情報科学研究科 情報工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。2000年4月、愛媛大学工学部電気電子工学科助手。2005年2月、University of Washington, Dept. of Electrical Engineering 客員教員。2007年4月、愛媛大学大学院理工学研究科電子情報工学専攻電気電子工学コース助教。2008年2月より現職。2008年5月、社団法人電子情報通信学会評議員。2009年1月 総務省情報通信審議会専門委員等を歴任。

私の人生テーマは、「ひとを幸せにする」です。きつと、どんな人も、何らかの形で、ひとを幸せにしようと思ったり日々努力しているのではないのでしょうか。例えば、家族や恋人、友人を大切にしたいという思いは、誰しもが自然に持つ思いです。また、災害時に、被災地のボランティアをしている人々も、困っている人をなんとか幸せにしたいという思いでボランティア活動に励んでいるのでしよう。つまり、みな何かしら「ひと」を幸せにしようと思ったりしています。私もそのひとりです。大学教員をしている私には、研究者として科学技術をもって、「ひと」を幸せにする役割と、教員として学生をはじめ関わる多くの人々を幸せにする役割とがあります。

大学の教員とは

なぜ大学の教員になったのでしょうか。実は、貧乏暇無しで損ばかりしています。もつと色々な職業が選べたのに…。安月給で、残業しても、休日出勤しても「銭にもありません。授業や実験、研究指導、学生や研究員の世話、大学の運営に関わる雑務で

研究者として

研究者として、あるときは最先端の技術を生み、またあるときは科学の基礎を築いています。生み出した技術は時間と様々な人の手を経て、人々の生活を豊かにする身近な技術となります。ですから、私は、生み出した技術が、他の技術と融合し進化した先には、必ず人々の笑顔があふ

07



Mayumi
Matsunaga

Rie Hori × Masayuki Sakakibara × Hideko Koshima

大学院理工学研究科 数理物質科学専攻・地球進化学コース 准教授 堀 利栄先生

大学院理工学研究科 数理物質科学専攻・地球進化学コース 教授 榊原 正幸先生



石を使って調べていますが、学生さんたちと一緒に研究しているあるグループの小さな化石について、今まで世界で一番古いとされてきたものよりも、古い2億2千万年前のものを発見しました。ワールドレコードをうちの研究室が持っているんです。

もう一つは、地球生物の80%ほどの生物が絶滅したといわれている時代のことです。この頃の記録はあまり無いのですが、今年三月に行ってきたニュージーランドの調査で、まさにその時代の大量絶滅の記録が残っているであろう堆積物を発見することができました。

小島 榊原先生はどうでしょうか。

榊原 実はうちの学生を火星に行かせたいと思ってるんです。ぼくは「生命の発見」が大きなテーマの一つですが、実際に研究しているのは過去の地球の岩石中に住んでいた、岩石を分解して食べる微生物についてです。

きっかけは10年前に、火星からの隕石が「生命の化石じゃないか」と話題になったことです。地表から10kmくらい下には大量のバクテリアが住んでいるのですが、地球の全体が凍った時代もバクテリアは生き残っていました。火星は地球が凍った時代と環

境が似ているので、火星の地下にもそういう生物がいると信じています。そんなわけで学生には「火星に愛大の旗を立ててこい。」なんて言っています。

— 学生たちに思うこと —

小島 先生方が壮大な夢を語ってらっしゃると、学生は面白いと思うのではないのでしょうか。

榊原 でも、今の学生を見ているとあまりに本などがたくさん出すぎていて、知識に囚われ過ぎていて感じます。新しい発見は教科書には書いていないし、教科書を勉強しても新しい発見はできないんです。そのことを先生方は教えないといけないと思います。身近なところにある新しい発見に気付くには、感性が必要になると思います。

小島 その通りで、面接などで進学する学生の動機を聞いても、大体が「知識を深めたい」とか「知識をたくさん増やしたい」という答えがほとんどで、違和感を持っています。

実際の研究室では、難しいことですが誰もやっていないことを発想したり

“同志”のわたしたち

夫婦であり、

小島 この度は愛媛大学で活躍する研究者のご夫婦ということでお話を聞かせて頂きます。

— これまでの経歴について —

堀 博士課程を修了して日本学術振興会特別研究員となった後、半年ほど愛媛大学で研究生をやっていました。その後、愛媛大学教養部の非常勤講師をしていましたが、教養部が無くなることになりました。講義職からも外れることになりました。他大学の非常勤講師などでもなんとか繋ぐうとしていた時に、愛媛大学で助手ポストに採用してもらいました。

小島 とにかく続けていないとダメですね。いくらでも（研究職に就く）チャンスはあるはずですが、機会が来た時に行動できるように準備しておくことが大事ですね。

堀 女性が研究者としてやっていく大変さは、先輩たちを見ていてわかっていたので、「研究が続けられれば、別に一生結婚しなくてもいいかな」とも思っていました。でも学振の特別研究員に運よく通って、二年ほど他大学の研

究所などに行っていた時、「あまり深刻に考えなくてもいいかな」と、ふっと開き直って結婚することにしました。

— 研究活動と子育ての両立について —

榊原 小学三年生までは学童保育に預けていました。ただ、毎日時間通りに迎えに行くのが大変でした。二人一緒の学会だと、一緒に連れて行っていましたが、平日の学会はあきらめていました。

小島 愛媛大学には、単身赴任で子育てをしている研究者もいますが、それだと余計大変ですよ。

堀 以前単身赴任で子育てをされていた先生が、「子育てはたくさん人の目がある方が楽だ。」とおっしゃっていて、すごく納得しました。なにか手伝ってもらわなければならない、人の目がちゃんとあるというのは、すごく安心できると思います。

小島 良い人材を育てるためにもカプルの研究者のフォロワーを考えないといけないですね。

堀 子どもを育てていると、人間として豊かになれますよね。人間にとっ

て一番大事なものは何か認識させられるので、研究者としての考え方の幅も出てくるし、研究一辺倒に偏らなくて良かったと思っています。幸そうに寝ているのを見るだけで、こちらも幸せになります。

小島 職場での生活と、家の生活の両立はいかがでしたか？

榊原 男性の心得ならあります。「毎日掃除しなくても人間死ぬわけじゃない。」

一同笑

とにかくあまり気にしないことです。細かく気にしてしまうと、キャパシティーオーバーになってしまいます。それと、僕たちは会議も「緒です。だいたい男性は、同じ会議に奥さんがいるとやりづらいのではないのでしょうか。家での関係を持ち込んでしまうと仕事がつらくなるので、意識しないようにしています。

— 地球の記憶が教えてくれること —

小島 これまでの研究の中で、面白いと思ったアイデアや出来事はありますか？

堀 二つあります。私は生命の進化と環境変動、地球の生命がどう風に進化してきたかを地層や微化



堀 利栄先生 Profile

略歴 / 1990年、大阪市立大学理学研究科地質学博士課程修了。1990年4月-1992年3月、日本学術振興会特別研究員。1992年4月-1992年9月、愛媛大学理学研究科研究生。1992年10-1994年3月、愛媛大学教養部非常勤講師。1994年4月-1997年3月、東雲短期大学非常勤講師。1994年4月-2005年11月、愛媛大学理学部生物地球科学科助手。2005年12月-2007年3月、愛媛大学大学院理工学研究科助教授。2007年4月より現職。2011年4月-2011年12月、スウェーデンランド大学客員教授。

榊原 正幸先生 Profile

略歴 / 1982-1984年、北海道大学理学研究科地質学鉱物学修士課程修了。1984-1987年、北海道大学理学研究科地質学鉱物学修士後期課程修了。1988年4月-1988年7月、日本学術振興会特別研究員。1988年8月-1993年10月、愛媛大学理学部地球科学科助手。1993年11月-1996年3月、愛媛大学理学部地球科学科助教授。1996年4月-2002年3月、愛媛大学理学部生物地球科学科助教授。2002年4月-2005年3月、愛媛大学理学部生物地球科学科助教授。2005年4月-2006年3月、愛媛大学理学部生物地球科学科助教授。2006年4月より現職。

発見したりすることが大事だと思えます。そのためには、絶えず考える力を磨いていかなければいけません。ニュートンがリンゴの落下を見た時も、それまで絶えず研究をしていたから万有引力の連想につながったのでしょうね。

— これから研究者をめざす人たちに —

堀 女性が欲張っても良い時代になっているので、いろいろなおことに果敢に挑戦してもらいたいと思います。

そのためには理解のある男性を見つけて下さい。それと、先輩研究者たちの言葉ですが、女性研究者の卵の頃に「とりあえず続けて下さい。続けていれば見てくれる人はいる。続けているのが大事」と言ってくれました。

— それぞれにとってパートナーとは？ —

榊原 ある意味では人生の中で一番長くいる相手ですよ。ね。「同志」だと思っています。

堀 お互いのよき理解者なんだと思います。お互い空気みたいな存在…無いと生きていけない、ということ。

限られた環境でも

研究を始め、

継続することが大切です。

藤山 幹子

とうやま みきこ

◎ 所属：愛媛大学大学院 医学系研究科感覚皮膚医学
◎ 役職：特任講師

08

Mikiko Touyama

手の届く範囲での研究の話

私は臨床医で、大学院にも入りませんでした。研究は、臨床の中から始まりました。医師になって七年目の頃、ある患者さんとの出会いをきっかけに、薬剤性過敏症候群という新しい疾患概念の立ち上げから関わることになりました。この疾患にウイルスが関与することを見いだしたのが始まりですが、それが普遍的な事象であることを証明するために、多数の症例検体を全国から送っていたら、検討することになりました。このため、ウイルス抗体価の測定、血液からのウイルスDNAの検出といった手技を一家から学ぶことになったのです。全く興味のなかった「研究」という分野でしたが、自分の推測を自分で証明するという面白さを知ることになり、この臨床研究と平行して、皮膚の培養細胞を用いた基礎研究も行うようになり、現在に至ります。

私には3人の子供があり、出産は、医師になって四年目、八年目、十年目のとき

でした。ちょうど研究を始めたころに、二人目、三人目の子が生まれたことになりました。研究に使える時間は常に非常に限られていたのですが、私自身の年齢が上

がって臨床にとられる時間が減ってきたことと、無認可でしたが信頼できる保育所に子供たちを預かってもらえたこと、私自身の実家が近くで頼りやすい状況であったことなどの要因により、臨床医と研究を続けることができました。

研究というと、国内や国外留学をしなければならぬような印象がありますが、私自身は実験手技のほとんどを愛媛大学内で習得しました。同じ科で研究を続けていた先輩や同僚、あるいは他科の研究者に、全く知識のない状態から教えていただき、実験を組み立てていきました。その後ずっと、自分の持つ持っているテクニックで勝負するという方針で研究してきました。ただ実際は、ひとつの手技を身につけると、それを応用して新たな手技を習得することができます。もちろん、同じ研究室の実験に慣れた仲間

をお願いすることも多々あります。

さらに、研究には情報の収集が必要で、論文を読むことが欠かせません。大学にいる間の決して多くはない時間をできるだけ実験にあて、論文は持って帰って読むことにしていました。実際に論文を読むのは、夜、布団の中でした。子供に本を読み聞かせ、その後子供が寝るまで横で文献を読みあれこれ考えるのですが、この時間がとても貴重でした。もちろん、そのまま寝てしまうことも多かったのですが。

限られた時間で、自分のペースで研究をしていますので、ひとつの結果を得るまでには、大変時間がかかります。どんな成果を出す大きなラボを見ると落ち込むこともあります。ここにいるからこそ自分の筋道にそって研究できるのだと思うようにしています。たとえば歩目から大きく羽ばたかなくとも、手の届く範囲から研究を始め、手の届く範囲で続けることはできるものです。

Profile

略歴／1989年、愛媛大学医学部卒業、同皮膚科入局。1991年、松山市民病院皮膚科副医長。1994年、愛媛大学医学部皮膚科助教。2011年より現職。

女性研究者が

安心して子育てできる

環境を。

伊地知 紀子

いちちのりこ

◎ 所属：愛媛大学法文学部人文学科
◎ 役職：准教授

09

Noriko Jichi

これが私の生きる道？

愛媛大学に33歳で赴任し、今年ちょうど11年目を迎えました。私は最初から研究者を目指していたわけではありませんが、学部三年後学期、周囲が就職活動に走り出すなか、私は以前から「女性」というだけでの賃金格差への疑問から就活になかなか踏み出せず、かといって公務員試験や教職科目には関心が向かない。好奇心旺盛というだけで大学院に入りました。そのあとは、心強い人の縁や研究チャンス、仲間たちに恵まれ、今日までやってくることができました。

私の専門は社会学・人類学・朝鮮地域研究です。フィールドは韓国・済州島および在日済州島出身者のいる地域です。研究を進めるなかで一番面白いことは、やはりフィールドワークから生まれます。そして、文献でさらに知見を深め、研究仲間と共有したり、授業を通して学生へ伝えるなかで、さらに新たな学びが生まれます。こうした小さな発見の積み重ね

日々はとても楽しいものです。

研究生活のなかで一番大変だったことは、育児と仕事の両立です。両立の問題は、妊娠時から始まります。入試試験監督が決まったときは妊娠2カ月目、まだ流産の可能性もあるこの時期に、丸二日の立ち仕事はやめたほうがいいと思いますが、学内の誰に相談すればいいのだろうと困りました。結局、体調不良を理由に休みましたが、違和感が残りました。少子化が叫ばれる時代に、なぜ産む側が気を回さなければならぬのだろうか。子供が3歳を過ぎるまでは保護者を土日の試験監督から一切外すという基準が必要でしょう。産後は4カ月目から職場復帰しました。復帰後の疑問は、夜間主授業担当になること、その時の延長保育費についてでした。担当がやむを得ない場合、仕事に関わる出費は雇用側が負担すべきなのではないだろうか。「産み損」と感じる社会では、ますます女性は産まなくなると実感しました。

出産後、育児は休みと終わりのない仕

事となります。それまで授業や会議以外は自分で100%采配できた日々が「私の時間」は一日二時間あればよいほう。もちろん、子供の成長とともに「私の時間」は少しずつ増えますが、それもろ歳を過ぎてから。しかし、授業の準備も学生の指導も、子供の成長を待つてはくれませんが、そんなに大変なら育休を十分とったらいでしょう、という声が聞こえそうですが、あいにくシングルインカムの私の家庭にはそんな余裕はないのです。

このたび、女性未来教育センターができ、とても期待しています。持ち女性研究者が仕事を続けるコツは、最近流行の自己努力(自己責任)には決して還元できません。私の場合は、母が何度も兵庫から通い、同僚の配慮で何とかやって来たことができました。しかし、こうした環境は誰にでも用意されていません。女性研究者・職員・院生・学生のメンタル・保育・就業環境などについて誰にでも対応できるセンターへ、愛媛大学が女性研究者の希望の星となるよう願っています。

Profile

略歴／1989年、神戸市外国語大学英米学科卒業。1993年、大阪市立大学文学研究科社会学専攻前期博士課程修了。1997年、大阪市立大学文学研究科社会学専攻後期博士課程単位取得満期退学。1999年、博士(文学)(大阪市立大学)の学位取得。2000年、愛媛大学法文学部人文学科助教。2007年より現職。

母親としての自分

「ロールモデル」と言われたとき、正直、少し違和感を覚えました。私は現在、妊娠中で、育児は未経験だからです（写真は友人の子どもです）。具体的なノウハウなどは何も言えません。ですので、母親を対象としたこれまでの研究の中で出会った女性の声から学んだこと、そしてこれから直面する子育てについて考えることを、お伝えしたいと思います。

母親研究は、大学院の修士課程から続いています。我が国では虐待のニュースがあるたびに母親が責められます。その事態に至ってしまった原因はどこにあるのか、本当に母親だけが悪者なのか、母親だけを犯人扱いすることで重要なことが覆い隠されている気持ち悪さ、が研究をはじめたきっかけでした。実際にはいわゆる三歳児神話に代表される「母性愛神話」を女性がどのように受け入れながら、もしくは拒絶しながら子どもと向き合っているのか、アンケートならびにインタビューを併用して調査しています。アンケート調査では千人程度の対象者の傾

向をベースラインとして描くのですが、インタビュー調査では、直接、ひとりひとりの女性にお会いして、個人的なお話やご意見を聞くことになりました。

「仕事するよりきついですよね。そういう意味では、主人は、自分のやりたい仕事をずっと突き進んでやってきているじゃないですか。同じ、それぞれの自分のレベルで勉強してきて、ある程度の自分がやりたいことがやれて、なのに女性は出産でそれを閉ざされるじゃないですか。それがちょっと納得いかなくなってきました。主人は好きなだけ例えば学会で発表したりとか、外国行ったり、あちこち行って、自分の何かこう、ものを勝ち取っているけども、(それと同時に)子どものお父さんじゃないですか。私もお母さんなんだけど、そっち(仕事)の部分は、子育てにはまってる分、できない自分が悔しい。」

この声は、看護師として勤務されつつ看護学の研究を続けたいという希望を持っておられる女性のもので、(括弧内は筆者の補足)。どんなに大変なときでもこの声に駆り立てられ、研究を進めることができました。そしてついに私自身も

母親としての自分に近づこうとしています。もちろん研究と実生活では異なることも多いでしょう。しかし、これまで多くの女性が悩みながら模索してこられた道にひとりりの女性として立つことで、いろいろとリアルに見えてきたこともありま

す。これから続く後輩女性のために、微力ながらこの道をできる限りなだらかにかつ広く大きいものとしていくことが自分の役割だと考えております。

仕事と家庭との両立を目指すにしても、良いも悪いもあるはずがありません。大切なことは、世間や周囲の思惑や雑音に惑わされない強さを持つこと、ある程度固い神経を持つこと、自分を助けてくれる家族や職場の方々への感謝を忘れないこと、そして何より自分は何を望んでいるのかということに自覚しそれに基づき行動できる。being,つまりは主体的な行為責任者となることではないでしょうか。蛇足として、両立を選択する場合は、パートナーがどれだけ家庭役割に積極的な男性なのか、結婚前に見定めおくことも必要かもしれません(笑)。

Sonoko Egami

研究にワクワクする

気持ちを、

持ち続けてください。

土屋 由香

つちやゆか

◎ 所属：愛媛大学法文学部 総合政策学科
◎ 役職：教授

研究者(その他の専門職)を目指す女性に、伝えたいこと

研究者になりたいと思っただけじゃ、はじめて留学した米国メリーランド大学大学院で、一次史料を使った研究の面白さに触れたことです。メリーランド州に隣接する首都ワシントンDCには「国立公文書館」があります。米国では情報公開が進んでおり、一定期間(現在では25年)が過ぎた政府文書は、安全保障上や人権上の問題が無いと判断されれば公開されます。会議の議事録から大統領の書簡まで、「え！こんなものも?」と思うものまで公開されています。身分証明書を出してカードを作れば、外国人でも自由に閲覧することができます。これらの史料を使って、外交政策がどのように立案・決定されたのか、誰がどのような役割を果たしたのか、大学院生でも「誰も知らなかったこと」を発見することが可能です。それは本当にワクワクする経験でした。

私の専門はアメリカ外交、とくに冷戦

期の広報文化外交です。最近の発見で特に興味を引かれたのは、1950〜60年代にかけて米国政府が「原子力の平和利用キャンペーン」の一環として、何十本の「原子力映画」を作って世界中で上映していたことです。2009年からこれらの映画とその背景について調査してきましたが、その上で福島原発の事故が起きました。ショックでしたが、いっそ研究しなくてはならないという使命感も感じています。

研究生活で大変だったことは、研究者になる決心が遅かったためにスタートが遅れ、しかも結婚・出産・博士号取得・就職という転機が次々に訪れ、なかなか落ち着いた研究環境を得られなかったことです。しかも修士・博士ともアメリカの大学だったために、先輩・後輩・恩師といった人間関係が大切な日本の学界で、コネも研究仲間も無く、最初はとても孤独でした。しかし、自分に「無い」ものについて、いくら嘆いても仕方ありません。嘆く暇があったら少しでも良い研究をして前進あるのみ、と割り切ったら楽になりました。

たくさん女性の声に

支えられながら、母親としての

自分に出会うまで。

江上 園子

えがみ そのこ

◎ 所属：愛媛大学教育学部
◎ 役職：准教授

10



Profile

略歴／2000年3月、早稲田大学卒業。2002年3月、九州大学大学院修士課程修了、修士(人間環境学)。2005年3月、お茶の水女子大学大学院博士後期課程単位取得退学、博士(人文科学)。2005年4月-2007年3月、科学技術振興機構(京都大学)研究員。2007年4月-2009年3月、北海道教育大学講師。2009年4月-2010年3月、北海道教育大学准教授。2010年4月より現職。



11

Profile

略歴／大阪外国語大学卒業後、企業勤務を経て1992年、米国メリーランド大学歴史学部・修士課程修了(M.A)。広島大学・総合科学部助手を経て、2004年、米国ミネソタ大学アメリカ研究学部・博士課程修了(Ph. D.)。2004年4月より現職。

Yuka Tsuchiya

研究者やその他の専門職を目指す後輩女性に伝えたいのは、辛抱強く良い仕事が続いていけば、きつと見てくれる人がいるということです。また多少回り道にしても、人生の帳尻を合わせることが可能です。スムーズに就職した人でも、途中で行き詰まることだってあります。昨今の就職事情は厳しいですが、あきらめないで頑張ってください。そして、研究にワクワクする気持ちが研究生活を続けるコツだと思います。(これらは、研究者を目指す女性でなくても当てはまると思います。)

最後に子育てについて。子どもはすぐに大きくなってしまっているので、思いきり可愛がって楽しんでください！子どもを紹介した人間関係も貴重です。私は3歳前の子どもを連れて留学しましたが、子どもが友だちを作ってくるので、大学関係者以外の人たちのお付き合いが広がり、アメリカ社会の色々な面を体験できました。それから「イクメンパパ」の協力はやはり大切ですので、パパの教育も忘れずに！

これから研究者になる

皆さんのご活躍を

期待しています。

高橋 憲子

たかはしのりこ

◎所属…愛媛大学農学部 施設生産システム学コース
◎役職…助教

12

Noriko Takahashi

今までを振り返って

研究者になりたいと思っただけは、植物工場という研究分野で砂漠での農業や宇宙農業といった未来の農業に携わる研究ができると思ったことです。実際に携わってきた研究は、現場レベルの植物工場の基礎研究ですが、いつかとは思っています。博士課程に進学する際、将来に不安もありましたが、とにかく頑張れるところまで頑張ってみようと思えました。博士号取得後にアメリカでポストドクをしていたのですが、その間にたくさん女性研究者と出会うことができました。同じ農学部内で、異なる研究分野のペルー人とインド人のポストドクの女性とルームシェアをしていたのですが、研究のことだけでなく、それぞれの国の文化や習慣を学ぶことができました。また、大

学の女性教員の数の多さにびっくりしました。アメリカでは博士課程の学生、ポストドクの女性の数も多かったです。

私が感じた日本とアメリカの大学の女性教員の環境の違いは、社会全体の家族に対する価値観の違いです。アメリカでは、女性教員も男性教員も家族との時間を大切にするという理由で、特別な場合を除き、ほとんどの教員は、17時には帰宅されます（大体、夜遅くまで残っているのはアジア人です）。また、休日も家族と過ごす時間を大切にされています。そういった面で、アメリカは女性教員にとって恵まれた環境だと感じました。日本の大学は、女性教員が少ないと言われていますが、博士課程に進学する女性も少ないのが大きな原因だと考えられます。女性研究者を育てる環境作りが重要になってくると思います。

後輩へのメッセージは、女性研究者になるには、不安な面もあると思いますが、大学に併設されている女性未来育成センター等には、アドバイスを頂ける先輩の方々がいらっしゃいます。このような機会を活用しながら、一人でも多くの女性研究者が活躍されることを期待しております。

研究内容について

研究室の大きなテーマは「生きているとはどういうことか？」です。

私が扱っているのはタンパク質の酵素で、その酵素がどう反応するのかメカニズムを見たり、酵素遺伝子が欠損したら生き物にどういう影響があるのかを研究したりしています。「見」何の役に立つの？ 無くても良いんじゃないか？」と思ってしまうようなものでも、それが無いだけで生物の生育などに大きな影響を及ぼすことがあるということが分かっています。調べ尽くされたように思われるものに関しても、まだまだ分からないことがたくさんあって、のめり込んでまいります。

研究の魅力は？

一つ解明できたように思っても、その上でさらに次の疑問が派生するので、終わりがありません。次から次へと分からないこと、知りたいことが現れ、探っていくようになります。

私が扱っているのはバクテリアですが、我々ヒトに至るまでの多くの生物を系統的に見渡したとき、「このあたりで進化したのでは？」と、思わず仮説を巡らせることがあります。空想や自分の中の仮説は自由な

ので、そういう瞬間が最近一番面白いなと感じています。

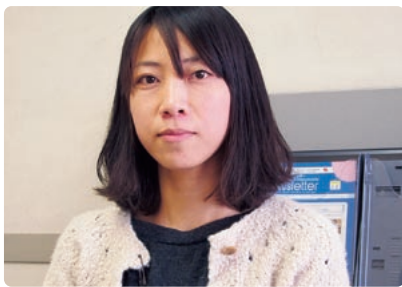
大学時代に成長したと感じること

成長なのかどうかわかりませんが、周りを気にしなくなったところだと思います。学生時代は、どうしても他人からどう思われているかを気にしてしまうことが多いと思いますが、周りを気にしなくなったおかげでやりたいことをやれていると思っています。

あと、人見知りをしなくなった点、成長かもしれません。人見知りをしていては、他の研究者とのディスカッションのチャンスを逃してしまいます。興味があるなら、相手が同じような立場の研究者であれば、肩書きのある偉い先生であれ、こちらから積極的に「コミュニケーションをとりにいく。そんな風になっていると、興味の対象を発端に話題が広がります。思わぬアイデアや情報を得ることがあります。まだ研究経験は浅いですが、人としても、科学者としても尊敬できる方々と出会えたことが私の大きな財産となっています。

進路決定のきっかけは？

もともと「動物に関する仕事」に興味を持っていましたが、その時一番やりたかったのは料理だったので、高校卒



フランス国立科学研究センター研究員

富川 千恵 とみかわ ちえ

Profile

略歴／鳥取県生まれ。高校卒業後、調理師専門学校を経て就職。その後一念発起し、愛媛大学応用化学科へ入学。2010年、理工学研究科物質生命工学修了 博士（工学）。2010年、The 9th Annual Meeting of Structural-Biological Whole Cell Project of Thermus thermophilus HB8 Whole Cell賞 受賞。

ます。研究者としてやっていきたいという思いはもちろんありますが、あまり重く考えすぎず、「こつこつ」と「歩み」つやいていきたいと思っています。

後輩たちへアドバイス

高校・大学受験などを控えている人にとっては、目の前のことを「つづつ」とやるというのはい見気楽なようで、とても重要なことだと思います。何故、何のためにこれをしているのか、何がやりたいのか、ときどき立ち止まって考えてみるのもいいかもしれません。計画どおりにいかず、無駄なことをやっていると思うことがあるかもしれませんが、無駄だらけの人生も悪くないと思います。

これからの目標・夢

十年先を考えるとというより、今は目の前のことをやっていこうと思

卒業生インタビュー

Chie Tomikawa

研究者への道を歩みはじめた
愛媛大学卒業生にお話を伺いました。

事業実施内容

1 女性研究者活躍のための環境整備

キャリア支援

育児などで多忙な女性研究者に
研究支援員の手当て・相談・交流を通じて、研究促進を支援

●女性研究者ネットワークの構築

- ・メール配信
- ・ホームページに掲示板設置
- ・交流会開催

●平成23年度前期研究支援員制度

4人に研究支援員を配置



●ひめルーム相談室開設



育児支援

女性研究者の最も必要としている育児を支援

●冬休み学童保育(試行)

(平成23年1月5日～7日)
[利用児童]9名



●夏休み学童保育

(平成23年7月21日～8月31日)
[利用児童]17名



●城北キャンパス保育所

えみかキッズ開設
(平成23年9月1日)



●メンタリング研修

(平成23年6月27日)
[参加者]18名



2 次世代育成支援

理系女子学生のキャリア形成を、セミナー・女性研究者との交流などを通じて促進

●第1回学生・若手研究者キャリアパスセミナー

(平成22年12月22日) [参加者]58名



●「女子中高校生の理工系選択支援事業」

(平成23年10月1日、29日)

女子中高生を対象に保護者や中学・高校教員の参加も可能な新しい事業展開へ。

3 女性教員増員の具体的取組み

◎女性教員の比率拡大の数値目標設定

2020年までに12%→20%へ拡大

◎「愛大式ポジティブアクション1プラス0.5」の実施による女性教員の採用促進

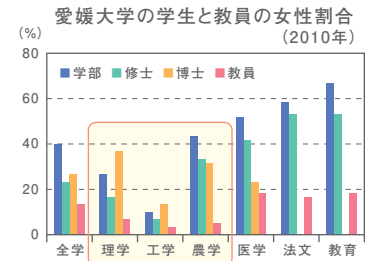
専任女性教員採用で助教人件費1/2を支給

愛媛大学 女性未来育成センター 愛媛大学女性研究者育成プラン

実施体制



3 女性教員増員の具体的取組み



実施内容

1 女性研究者活躍のための環境整備

女性研究者へのキャリア支援

研究支援員制度の実施
相談体制の整備
女性研究者ネットワーク構築

育児などで多忙な女性研究者に
研究支援員の手当て、
相談、交流を通じて、
研究促進を支援

育児支援

学内学童保育所の新設
学内保育所の運営
大学院生は研究支援員、学生は保育人材、
女子中高生理系進学支援などに参加

女性研究者の
最も必要としている
育児を支援

2 次世代育成支援

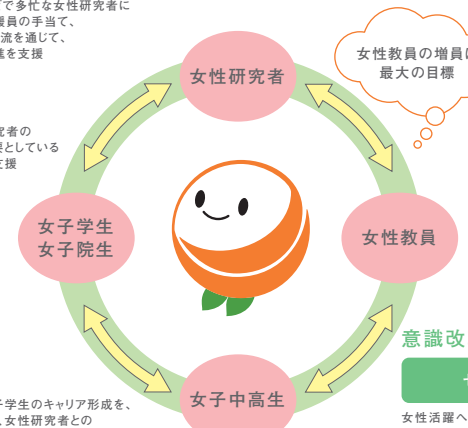
キャリアパスセミナーの開催
キャリア相談の実施
女性研究者との交流会開催

女子中高生理系選択支援

理系女子学生のキャリア形成を、
セミナー、女性研究者との
交流などを通じて促進

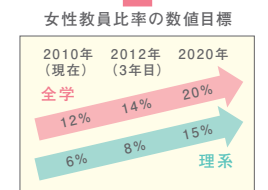
[えみかキャリアサイクル]

すべての世代が互いに助け合い成長するシステム構築



2020年までに女性教員比率と
全学20%、理系15%に拡大
愛大式ポジティブアクション
「1プラス0.5」

専任女性教員を採用した場合、
助教人件費の半額を、
全額経費から当該学科に支給



意識改革

セミナー、シンポジウム開催
女性活躍への意識改革は全ての根幹。
管理職、教職員、学生への啓発セミナー、情報発信により促進

女性未来育成センター新設、広報活動、HP情報発信

意識改革

セミナー・シンポジウム開催

女性活躍への意識改革はすべての根幹。

管理職、教職員、学生への啓発セミナー、情報発信により促進

●キックオフシンポジウム

(平成22年11月5日)
[参加者]1185名



●第1回管理職セミナー

(平成23年1月12日)
[参加者]58名



●第1回四国女性研究者

フォーラム(共催)
(平成23年1月12日)



●第1回女性未来育成センター

公開シンポジウム
(平成23年3月11日) [参加者]87名



●医学部ジョイントセミナー

(平成23年6月24日)
[参加者]31名



<http://hime.adm.ehime-u.ac.jp>

国立大学法人愛媛大学 女性未来育成センター

Women's Future Development Center, Ehime University

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番（愛媛大学城北地区教育学部4号館3階）

Tel/Fax: 089-927-8602 E-mail: hime@stu.ehime-u.ac.jp

